

こうした仕事をするときに注意しなければならぬのは、最初は良い動機で始めても、仏像を造ることがお金儲けにもつながらず、そのために仏像を造ろうという気持ちから芽生えてくる可能性があるということです。お金が動くので欲望がかき立てられやすいのです。そうなるとう佛教の教えの興隆のためにも、お寺のためにも役立たず、個人あるいはグループの利益のための仕事になってしまいます。私たちは個人的利益のためには絶対仏像を造らないと心の中で固く誓い、三宝とドトウブチェン・リンポチェにも同じく誓いを立てました。

ドトウブチェン・リンポチェは常日頃からおっしゃっています。「親鳥は卵を温め、ヒナを孵し、巣立つまで育てても、いったん育つて飛び立てば、古巣に立ち返ることはない。こんなことでは、とてもお寺や有情のためになることはないだろう」と。こんなことにはならぬよう、細心の注意を払わなければならないと思ってきました。

幸いにしてこの仏像を造る方法が確立できたので、古訳ニマ佛教の高僧ナムカイ・ニンポ・リンポチェのお寺など、いくつかのお寺にこの方法を教えてさしあげることができました。

僻地にあつて金銭的に困つてお寺にも、今までより安価に仏像をつくる方法を伝えることができたのは良かったと思つています。

——わかるかぎりによいですから、他のお寺のお坊さんと話す機会があると思いますが、他のお寺と比較した上でのチョルテン・ゴンパのお寺の特質を話していただけますか。

お寺は仏教を守り伝えるという意味では全て同じだと私は思っています。

⑤ 工房の様子。カルマ師の制作による彩色の終わったプラスチック製の仏像。



ただ、今は多くのお寺ではそれぞれの役割が分かれてきています。例えば学問寺(シエダ)では、学問に専念するだけで、お寺で必要とされる様々な儀式を行うこと、仏像を造ること、縫い物、仏画を描き、それを絹の布に貼付けて完成させるといったことについては、全くといっていいほど学ばれることはありません。最近ではそれぞれ専門化が進んでいますが、昔は、少なくとも私たちがお寺に入ったころは、全てを学ぶ必要がありました。それ以外にも、木で金剛槩という複雑な法具を造れるようになったし、占星術も学びました。このお寺の建設にあつてはブルドーザーの運転すら学びました。当時はお坊さんの数が少なかったということもあつて、何でもできることが求められました。今では、それぞれの分野で、熟練した僧侶が仕事にあつています。全てを学ぶことは困難ですが、それでも、それぞれの性向によつていろんなことができる多才な僧侶が多いと言えるのではないかと思います。

ドトウブチェン・リンポチェは、僧侶が寺を離れてそこそこ、さまよい歩くのを好まないため、お坊さんたちはお寺からほとんど離れることはありません。カトマンズでは日中は映画館が赤い僧服で埋まってしまうと聞

いたことがあります。ここでは考えられないことです。

——お寺は釈尊伝来の仏法を守り伝え、亡くなった方の法要をしたり、人々が抱えるいろんな問題に直接的、間接的に答えて行くことによつて心の抛りどころになるという大きな役割があります。この役割を具体的に果たすのはお坊さんで、その役割は大きいと思います。ところで、このお寺が新参のお坊さんを受け入れるとき、何か基準みたいなものはあるのでしょうか。

どんな人間であつても、仮に一日だけであつても、お坊さんとしてお寺で生活することには大きな意味があるとドトウブチェン・リンポチェはおっしゃっています。また、「どんなお坊さんであつても必ず何かの役に立つものであり、行いが悪いなど、欠点があるからといって追い出すのはよくない」。これが、このお坊さんを育てる上で大切なポリシーです。

——確かにそうですね。このお寺のあるお坊さんが言っていました。お寺は学問や修行を通じて悪い人間を善い人間に育てる場なのだから、素行の悪い僧侶を追い出すことは本末転倒だと。

あと、ドトウブチェン・リンポチェはこうもおっしゃっています。二人のお坊さんがいて、一人は頭が悪いが人間的にしっかりしている僧侶、もう一人は頭が良いが人間性が欠けている僧侶、この二人のうちどちらが最終的に頼りになるかといえば、経典を知つていようがいまいが、人間性にすぐれた僧侶のほうがずっと頼りになるだろうと。

また体罰は、とくに年端のいかない小僧さんには厳禁となつています。子供たちは力や暴力ではなく、慈しみの心で育てていかなければならぬのです。

【広告】1/2段 横91×縦65mm

広告スペース

ればならないのです。

以前は早朝四時から僧侶全員で毎日加行のお経を唱え、密教の三根本(師僧・本尊・茶枳尼)をお祀りしてましたが、幼いお坊さんたちにはあまりに過酷だということで、今は小僧さんたちは早朝の勤行には参列していません。

——カルマさんはなぜ僧侶になりたいと思つたのですか。

私は仏法を理解して僧侶になろうと思つたわけではありません。幼い頃から僧侶や、密教行者さんたちにお会いすると、なぜかはわからないけども、とても嬉しかったのを覚えています。密教行者さんたちは、下半身には白い衣をまとい、長い髪を編み、法具を入れたバッグを持つという出で立ちでした。今ではこうしたかっこうの行者さんたちもあまり見